母なるものへの希望

小さき声のカノン

●監督：鎌仲ひとみ/プロデューサー：小泉修吉/音楽：Shing02/撮影：岩田まきこ/出演：佐々木るり，佐々木道範，佐藤晴美，ヴァレンチナ・スモルニコワ，他/2014/119分/製作・配給：ぶんぶんフィルムズ
●公式サイト：http://www.kamanaka.com/canon
●3月7日より渋谷シアター・イメージフォーラム，フォーラム福島ほかにて全国順次公開

© ぶんぶんフィルムズ

東日本大震災の発災から満4年が経ちました．被災地の復興が順調に進むことを祈っておりますが，震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故については，がれきの撤去や廃炉にむけた取り組みもまだまだ途半ばの感があります．また広範囲に及んだ放射性物質による汚染への対策も重要な課題です．

今月ご紹介する「小さき声のカノン」は，以前より原子力発電の問題を積極的に取り上げてこられた鎌仲ひとみ監督の最新作です．

事故により空間放射線量が高くなってしまった地域に住むお母さんたちをカメラは追います．ある母親は移住という選択をします．ある母親はできるだけ子どもへの被曝を防ごうと，仲間とともに通学路の除染を自主的に行ったり，汚染されなかった地域から食材を取り寄せて，食事の準備をしています．

低線量放射線の長期被曝の健康影響については議論のあるところです．世界には，自然環境による空間放射線量が，福島の事故で汚染された居住地区の，現在の線量を上回っている地域があるのも事実です．しかし，震災前よりも被曝線量が高くなった状況で子どもを育てることに不安を感じている母親がいるのも，また事実であり，鎌仲監督は，チェレノブイリへの取材も含めて，その姿を丹念に追っています．現在の汚染レベルでは健康影響は考えにくい，と言うだけでなく，母親たちの不安に応える施策が求められるのではないか．そんな声がカノンのように響いてくるドキュメンタリー映画です．　（桜山豊夫）

公衆衛生　vol.79 No.5　2015 May　5

次号予告

特集

死因究明制度の現状と将来展望

日本の死因究明制度の現状と将来展望——福永　龍繁
日本の法医学教育および死因究明制度の歴史——岩瀬博太郎・石原　憲治
日本の監察医制度の歩みと課題——松本　博志
欧米の死因究明制度の歩みと現状―日本との比較——藤宮　龍也・白鳥　彩子
日本の死因究明制度の課題―法学者の立場から——福島　至
わが国の死因究明に関わる医師の教育体制の確立とその課題——松本　博志
死亡時画像診断技術の現状と課題——高橋　直也・樋口　健史
Public health and Safety と死因究明制度―公衆衛生の立場から——反町　吉秀・瀧澤　透
医療現場における死因究明の現状と課題―医療事故調査制度——木村　壮介

視点

公衆衛生のリーダーシップ——角野　文彦

©IGAKU-SHOIN Ltd. 2015